カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センターたより

夏号
19年8月
No.54

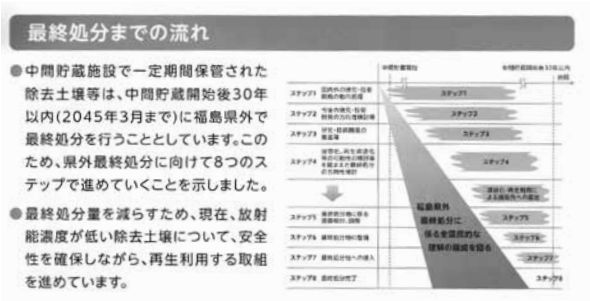
カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター事務局
〒604-8006 京都市中京区河原町三条上ル　カトリック会館７Ｆ
発行人／奥村　豊
TEL&FAX075-223-2291　E-mail: bukatu@kyoto.catholic.jp
Home Page http://www.kyoto.catholic.jp/bukatu/

嗣（し）業（ぎょう）

マグダレナ三千代（イエスの小さい姉妹の友愛会）

7月30日、東京電力は福島第二原発4基全てを廃炉にすることを決定した、とは言っても45～50年先、2065～2070年の話で、今決めている人たちが、誰も最後まで責任を取ることはない。

大熊町と双葉町の海側の広大な敷地に建設された中間貯蔵施設への汚染土壌の搬入も始まったばかり。仮置き場に置かれているフレコンバックの数は140万余袋。搬入のために一台のトラックが積むことができるフレコンバックの数は6袋、単純計算で233,333回の搬入を要することになる。中間貯蔵から福島県外での最終処分に向けた取り組みは８ステップで2045年3月までに完了するとされている。今、決めている人の誰が責任をとるのだろうか。



詳しくは〔環境省 中間貯蔵施設情報サイト〕もご覧ください

県外最終処分に向けた取組

http://josen.env.go.jp/chukanchozou/facility/effort/

数か月の間に二度、この中間貯蔵施設の情報センターと浪江町、請戸（うけど）の碑を訪れた。うっかりして侵入禁止区域に入ると、そこは廃炉や中間貯蔵に従事する人で外部から来ている人のプレハブの宿舎が立ち並んでいた。原発付近になると線量計のアラームは鳴りっぱなしとなる。1度目の時、再開された浪江の駅に行って、何人位の乗降客があるのか尋ねると、「殆ど無いですよ、浪江に家がある人がたま～に来るくらいで…」復興パフォーマンス！　請戸には高台に墓地と震災犠牲になった方たちの碑がある。更地の手前は新たにトン袋が山積みされていて、遥

か向こうに取り残された請戸小学校があり、その先に海が広がる。ここに人が戻って来ることはあり得ない。

第一原発で溜まり続ける汚染水は 110 万トン！敷地内に置かれているタンクの数はほぼ 1000 基に達している。様々な方法を試みたものの、お手上げの状態で、稀釈して海に流すことすら言及し始めた。一方 5 年半遅れで行われた遠隔操作によるロボットでのデブリの取り出し…取りだされた小さな物体は結局デブリではなかった可能性が高いとの結論で終わっている。
毎日のテレビのニュース福島の最後には、主として原発周辺の放射線量が発表され、先週からは海の汚染度を知らせる数値も流される。私はここ本宮で時折放射線量を測っているが、最低の数値はテレビで流される数値よりも高いのである、何でだろう… !!??

近所の人達と話している時、「昔はね~、みんなで山菜取りに行ったんだよ～、キノコとかさ～…」ある集いで訪れた山道で、ワラビを見つけた時、「ワラビは取らないで！」と注意され、別の人は「内の方は南瓜がだめだっていうんだ…」そう言えば、スーパーで買う南瓜の産地は沖縄、フィリッピン、メキシコであることに気づかされた。

春キャベツの柔らかな色合いと、歯触りを楽しみながら、ある農家の人の顔が思い出された。著名な大学教授が大学生を数人連れて、聴き取りをした DVD を見るようにとある人が貸して下さった。仮に N さんとする…N さんは高齢になったお父さんを手伝うために、震災の 1 年前に仕事を辞め、実家に帰り農業を手伝っていた。そして 2011 年 3 月、8000 個のキャベツが出荷される矢先に、原発震災が起きた。Fax 一本の「出荷停止」通知の翌日、父親は先祖代々の畑で縊死した。訥々と語る一つひとつの言葉は心を穿って響く。そしてこの人は今も先祖代々の土地を耕し続ける。福島地方のテレビニュースは、度々若い漁師の人達の思いを伝える。汚染水を稀釈して海に流すことについて、3 人の息子の父親は強い口調で、「8 年経って、やっと漁に出られるようになって、俺は 3 人の息子を漁師にしたんだ、海をまた汚すことは俺たちに死ねというようなもんだ！」漁に出られるようになったと言っても、漁獲高は以前の 2 割に満たない。

福島の原発は首都圏の電力を賄うために建設された、ここから首都圏まで送電線の建設が為されたのなら、送水管の建設も可能なはずと思ってしまった。仮設住宅から復興集合住宅に移り住んで間もなく 50 代の男性が孤独死した。同じ階に住む人達は、まだ男性の名前すら知らなかった。磐城に移り住んだ若い住職さんは檀家さんの住む相馬まで毎日出かけて行く、近所に越してきた 9 ヶ月の男の子がいる若い夫婦、富岡町の消防団員として、毎日長距離を出勤して行く。　この巻頭言の準備をしていた 7 月 29 日、ミサの第一朗読で「主よ、私たちの中にあって進んでください。確かにかたくなな民ですが、私たちの罪と過ちを許し、私たちをあなた

の嗣業として受け入れて下さい」という言葉を頂いた。ここで、この理不尽な現実を様々な仕方で受けがって生きているひとり一人の人たち、海ではなく、大地ではなく、この人たち自身が嗣業となって行くのだと思わされた。

シリーズ：聖書（いのちのことば）を生きる

不安でいっぱい

奥村　豊（京都教区司祭）

サウル王がダビデを殺そうと図るにいたったのには、自分の位が奪われるのではないかという心理がはたらいていた。また、ヘロデ王が幼子イエスを殺そうとした心理もこれと同じだ。イエスが福音宣教を始め、その存在に「ヨハネが生き返った」と怯えたことも同様である。これらには、自分の存在への根源的不安が見てとれる。実際にはダビデやイエスが直接危害を加えるような存在ではないのにも関わらず、頭の中で自分の存在を脅かすものとして繁殖させていくのである。このようなことはおそらく誰にでも生じうることであって、何かのきっかけさえあれば、徹底的に相手を貶め先に叩き潰してしまおうとするのだ。人間関係の中で固定されてしまった地位や身分をわたしたちは容易に手放すことはできない。それによって身体的・精神的・経済的安定が確保されるからだ。地位や身分が何者かの登場によって脅かされると、不安・恐れ・怒りなどの感情が生じ、それらを上手くカムフラージュさせて、事実の改竄・隠蔽・弾圧へと発展していく。

教会の中でもそのようなことが生じる。聖職者による子どもや女性に対する性的虐待は現実だ。このような福音とは正反対の犯罪行為が教会の中で行われ続け、隠蔽され続けてきた。そこにはやはり組織が破壊されるのではないか、安定が脅かされるのではないかという不安や恐れが支配していたのだろう。あってはならないことが起こったのにも関わらず、なかったことにしてきた教会の責任は非常に大きいと言わざるを得ない。なぜこのような恥ずべきことが続いてきたのか。それは聖性、清さ、品位といったものをはきちがえてきたことにあるように思う。それは偶像崇拝と言えなくもない。人間が造り出した聖職者像に無理矢理にでも一致しなければならないという強迫観念によって、自分自身の姿も自分が接する人々の姿もしっかりと見ることができなくなった結果ではなかろうか。これは霊的養成に関わることなのでまた別の機会に。

また、ハンセン病者の方々に対する教会の対応にも同じことが言えないだろうか。社会的疎外からの保護の必要があった人々に対して教会がとった措置は必要な部分も確かにあったであろう。しかしながら、隔離の必要のない人々を家族から引き離し国の政策に従う結果になった心理を今一度検証してみる必要がないだろうか。つまり、保護して手厚く面倒を見るという善意だけではなく、何らかの恐れ不安という動機であったかもしれないということである。福音をのべ伝える教会はその建前から、ハン

セン病患者に対して何もしないわけにはいかない。社会的疎外から彼らを守らなければならない。***その守り方に問題はなかったか。***感染力が弱く隔離の必要のないハンセン病者を守るには、その事実について、恐れと不安をもって石を投げつけている人々に知らせることだったのではなかったか。「あなたがたがゆるさなければゆるされないまま残る」罪を放置してしまったのではないか。この場合の「ゆるし」とは、人々を誤った認識から解放することである。しかしそのようなやり方が相当な困難を伴うことは容易に想像できる。教会自体が社会から大いに攻撃されるわけだ。そこに不安や恐れが簡単に生じた。下手をすると教会の存続にも関わる一大事なのである。そのようなことを表立っては口に出せないし、議論することもできない。おそらく教会は国の隔離政策に加担しようとは考えていなかっただろうし、教会の使命と確信して保護したのだと思う。しかし、結果としてハンセン病者の社会的疎外からの解放、人々の誤った認識からの解放のどちらをも成し遂げることはできなかった。その心理的原因はやはり教会組織が抱えている不安や恐れなのだ。

参議院議員選挙の最中、どこから聞こえてきたかは覚えていないが「不安を抱えている人には国を任せられない」という発言があった。特定の人物を指して言っているのだろうが、これはかなり普遍的な示唆に富んだ指摘である。不安や恐れを抱えていない人は一人もいない。不安を解消しようとする人間の心理が生きる力を産んでいると言えよう。しかしその解消の仕方には二通りある。一つは、不安がないような者のようにふるまうこと。まあこれはごまかして乗り越えていくこと。肝要な在り方は後者である。だから「不安を抱えている人には国を任せられない」というのは正しくは「不安に向き合いそれを乗り越えようとしない人には国を任せられない」になるだろうか。

教会に不安・恐れがなかったことが一日たりともあっただろうか。常に危機にさらされてきたことだろう。もう一つは、不安に立ち向かうこと。不安を生じさせている原因を突き止めること。

養成も社会活動もその他あらゆる場面でも不安だらけだ。これらは受け止めていくしかないのであり、ごまかしでは隠蔽が始まる。

この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願い通りではなく、御心のままに

これが不安に立ち向かう聖なる存在のことばである。

事務局のまとめ　インド・ダリットと日本の部落解放運動

２０１９．６．１５．信徒の会と部落差別人権活動センターの共同学習会

講師：安田耕一さん

学習会へのお誘い文は、「世界はますます緊密に関係し・影響し合うようになって来

ています。インドで紀元前１０世紀に成立したカースト制度が生み出したアウトカースト＝現在の運動ではダリット＝砕かれた者たちの生活に日本の解放運動が通用するか、という課題を胸に１０年以上インドのダリット村で連帯の運動を築いてきた安田耕一さんです。フィリッピンでも同じ実践をされてきていますので、世界的に見て、日本の解放運動のどこがインドで通じる点で、どこが通じない点であるかを検証していただき、これからの日本の解放運動を展望していきたい、と思います。」と大きく構えておりましたが、さて実際はどのようにお話と討論が進んだでしょうか？

日本の解放運動が通用するか、という課題については、1987 年にフィリッピンでおこなわれたアジア国際先住民族会議に部落解放同盟として招かれて、栃木県連の和田さんが部落問題について説明したが、全然わかってもらえず「人権問題」として語る必要を痛感した、という報告が「なるほど」と納得できました。
インドはフィリッピンよりもデカく歴史も深いので、「なるほど」とすぐには行きませんでした。安田さんの関わりの発端は栃木のアジア学院に研修に来ていた２人のダリット出身のインド人。日本に部落差別があるときいて、部落解放同盟栃木県連を訪ねて来た。一人はジョン牧師で、教会での聖餐式の時の「あなたから聖餐を受けたくない」と拒否された経験を持っている人です。インドのキリスト教徒(カトリック、プロテスタント)の７０～８０％はダリットといわれています。カースト差別を嫌ってキリスト教(イスラム教)へ改宗する動きにタミルナドゥ州政府は改宗禁止令をだす事態になった。と言っていました。ジョン牧師は、今はタミルナドゥ州の北部地域で活動中、とのこと。

ジョン牧師が、日本の解放運動で感心した点は、①運動が全国規模であること。（インドは言葉が多くて、バラバラ。英語は教育がある人の物で、ダリットは英語が使えないし、公用語であるヒンディ語も学校で習わないと使えない。）②インドでは貧困対策の NGO 活動が多いが、政府批判の活動につながるので、政府から再登録をもとめられ、海外からの支援が停止されている。だから、教育を重視し、当事者自身の意識化による行動への促しが必要になってきている。③行政と直接交渉し、交渉自体が意識化の教育の場になっているなど、日本の部落解放運動から学ぶ点である。ということでした。

日本の解放同盟側で、インドから学ぶことはいろいろありましたが、まず、膨大なインドのダリットの課題を理解することから始まりました。街灯がないので、夜間に蛇にかまれるから、街灯をつけて！という運動。女性の政治進出を助ける法律。農村貧困撲滅法。などなどを世界の差別撤廃の流れの中で位置づけていく必要を安田さんは説明してくれました。日本の「解放令」は１８７１年とアメリカの「奴隷解放宣言」１８６３年のは近いし、１９６０年の「同対審」とアメリカ公民権法１９６４年も同年代にあることに留意が必要。マイノリティ政策の「制度設計の違いの意味」について研究が

必要。

過酷な労働が背景にあるとしても、密造酒の飲酒によっての家庭内暴力が激しいので、NGO の女性が業者に抗議に行ったら、殺されてしまったという日本では考えられない困難を受けながら、インド・ダリットとの交流は続きました。運動が進むと、カーストを越えた結婚も生まれてきます。しかしそれは、カースト制度が崩れるとの危機感となってシュードラ階級のグループが襲ってくることもありました。しかし、全体的にいえば、ヒンズー教は根深いがダリット運動の前進は続くだろうと思われます。露骨なヒンズー教の秩序からの離脱の動きも顕著になり、ムスリムやキリスト教への改宗が起きるのだが、現在の政府はＢＪＰヒンズー原理主義の政府なので、ヒンズー教秩序からの離脱の流れをヒンズー体制の危機ととらえ、ヒンズー教の絶対優位を維持しようとする者たちとの摩擦を生み出しています。（日本も天皇代替わりのキャンペーンが強まる中で、かろうじて、先日は長谷川豊議員の差別発言を糾弾。天皇制賛美の世論に一矢報いることができた）。アンベドカル文化グループの少女たちは踊りを通じて凛としてダリットへの差別撤廃や女性の人権を訴えてきたが、結婚すると、「そんなものなんになる」と言わんばかりの現実があるのが、腹立たしいとのべ、たわいもなく少女たちの声は押しつぶされていく現実が溢れています。かつて同行した熊本理抄さんは日本の部落の女性たちの経験をダリットの女性に伝えるべき責任を指摘している。

インドでは、辛い経験を分かち合ってきたな、と思う。この経験をテコに前に進んでいける。沖縄もアイヌも部落も苦難の中にあるが、部落に生まれてきたことは、マイナスではない。当事者のみで完結する運動ではなく、マイノリティ同士の出会いから希望が生まれるだろう。そして、大きな流れで言えば「マイノリティ問題は個別に運動するのは限界」あることを認識すべきだ、世界の人権運動流れの中、部落解放運動を位置づけ、連帯を模索すること、日本では「包括的な差別禁止法」が必要である、とのことです。

この点で、注目すべきことは、２０１８年に国連人種差別撤廃委員会が「沖縄は先住民族」との勧告を出したことである。「沖縄独立論」も消えていないし、1903 年の人類館事件も過去のものとは言い切れない現実がある。何よりも、ヤマトンチュウはウチナンチュウを切り捨てても構わない、とした歴史を反省していない。（事務局注：ヤマトンチュウが平和を享受するために、沖縄の軍事化をＯＫしてきた歴史・現実を見ると、「沖縄を生かす部落解放運動の可能性」を探りたくなる。来年の学習会を沖縄で実現したいが、われわれの資金力では無理があるので、代わりに大阪の大正沖縄タウンにて、学習会を実現させたい。可能性を調査中。）

メモ：参加者２０名（信徒の会１３名：大阪センター７名）（信徒の会と大阪センターの共催の形は、効果的な協力の形と評価出来るのではないか。）

大阪・大正区・沖縄タウン現地研修に参加して

おおたまさる（小さい兄弟会）

２０１９年８月５日、大阪環状線・大正駅に１１時半に集合して、沖縄タウンの現地研修会・フィールドワークが行われました。第３０回全国キリスト教学校人権教育セミナー実行委員会の企画で、大阪市内の釜ヶ崎・生野コリアンタウン・大正沖縄タウン・太鼓作り・大阪の戦争遺跡などを訪ねて人権を考える現地学習としようとの企画でした。

沖縄タウンを選んだのは、２０２０年にここで僕らの部落差別人権活動センターの学習会か合宿ができないかとの思いで、下調べに来たと言うわけです。沖縄の玉城知事の奮戦ぶりと安倍政府の聞く耳持たぬ強引な辺野古埋め立てを見るにつけ、沖縄問題を心底から理解したい、との思いに駆られてのことです。熱意はあってもお金がないので、沖縄までは行けないけれど、「沖縄タウン」を見れば、本質的なことはつかめれる予感がありました。

予感が当たったところと外れたところが両方ありましたが、当たったところから行きますと①沖縄は本州から遠く離れた島です。そして沖縄タウンも大正区という島にあります。どういうことかと言うと大正区は木津川と尻無川によって、大阪市から切り離された三角州です。木津川と尻無川は大きい河ですので船が通ります。大きい船が通ると橋は邪魔になるので、三角州の大正区に行くには、橋がないので、渡し船で渡ります。江戸時代はそうでした。さすがに今は橋が３つほど出来てはいますが、基本の交通手段はいまだに７つの渡し船です。７つの渡しの一つは落合下渡船場で、これを使うと隣は西成区で芦原橋のリバティ大阪や新今宮の釜ヶ崎に出られます。大正めぐみ教会が昼食の会場だったのですが、そこの牧師さんは「渡船でリバティの集会に出ても、午後９時過ぎると渡船がなくなるので、グルッと大回りして帰ってくるんですよ。」と笑っていました。
②次の当たりは、仕事です。第一次世界大戦後、沖縄の砂糖価格が暴落して、ソテツの実や幹を食べて飢えを凌ぐ有様だったそうで、生きるすべを求めて多くの沖縄に人が阪神地方の製紙工場・紡績工場に仕事を求めて来て、生活を切りつめて沖縄に送金を続けたそうです。
③そして、次は差別です。「朝鮮人・琉球人お断り」との張り紙が出されたそうです。仕事につけず、アパートにも入れないウティナンチュウが名前や生活風俗をヤマト風に変えることを余儀なくされました。
こうした発見をテコに、学習会の実現を目指したいとおもいます。　　以上

おいちゃんの Human Rights

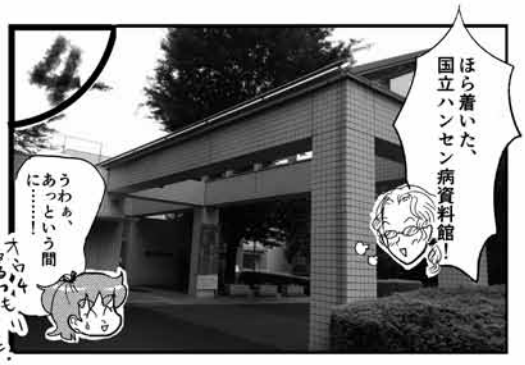
by タナカ・ユーマ

ガタン ゴトン

ガタン

ねーねー、おかぁ、あれ見てー。

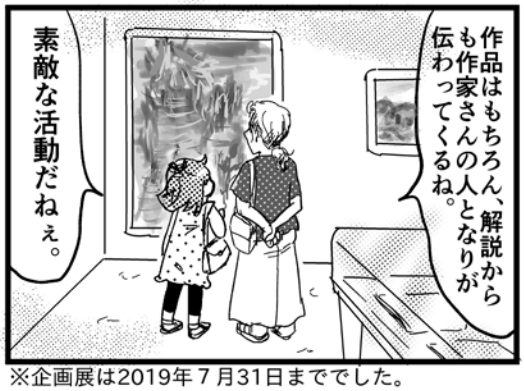
#57 ちょっと!? お出かけ



#58 お目当ての企画展!!

『キャンバスに集う〜菊池恵楓園・金陽会絵画展』……かぁ。

熊本県の菊池恵楓園の絵画サークルで制作されたんだって。



※企画展は2019年７月31日までした。

#59 いざ、常設展!!

2019. Aug.

部落問題と向き合う私たち

日　時：2018 年　10 月 7 日（日）　　13 時～
8 日（月・祭日）12 時 30 分
場　所：大阪梅田教会サクラファミリア
発題者：石井眞澄さん・石井千晶さん

司会・太田勝さん
『部落問題と向き合う若者たち』と言う本があります。その本の最初のところに載っている石井千晶さんと眞澄さんのお二人です。

眞澄さんは 1978 年、千晶さんが 1982 年生まれです。この本の中でいわれている事は、自分たちが部落差別と出会う中で、いろんな苦しみや悩みというものがあり、そこから抜けた後に他の若い人達に、そういう苦しみに遭ったらどうしたらいいかと、いう事をお話されている活動をしていらっしゃいます。
この本の中で十何人かの人達が、インタビューを受けてくれて、それが本の内容になっています。この本の中でご自分の顔写真も名前も本名で出しておられるので、話をしてほしいと頼まれる事が多いとおっしゃっています。
夏が終わって秋になって正月までは講演活動が忙しいとおっしゃっています。それでは早速お二人のお話しに入りたいと思います。

眞澄さん：
こんにちは、僕ら二人は滋賀県の愛荘町（あいしょうちょう）と言う町から寄せていただきました。愛荘町って何処かといいますと、彦根から 30 分ほど南に下った琵琶湖の東側で真ん中ぐらいに位置しています。簡単に自己紹介させて頂きますと、こういった講演活動をいろんな縁でさせてもらっているのですが普段は、僕は自営の仕事をしていまして「石材店」でお墓をつくったり、建築関係の石工事に携わる仕事をしています。
祖父の代からしていまして私で三代目です。人前でしゃべるということが苦手ですが、僕の体験とかをちょっとでも皆さんに知ってもらいたいと思って頑張って話しさせてもらいます。よろしくお願いします

千晶さん：
私は部落の人間で、近江牛のところの地域なんですけれど、結婚をして今は一緒に仕事を手伝っています。私は「石」の事はまだまだ分かっていないのですが、役に立てるように頑張っています。まだ緊張していて本調子が出ないのですけれど、・・・

眞澄さん：普段はこんな感じじゃなく家ではめちゃくちゃよく話すのですが、

千晶さん：　一昨日からすごく緊張していてまだ本調子が出ないのです。

眞澄さん：
僕らがよく講演に行く先は、中学校とか高校が多いです。高校生とか中学生は比較的年齢が近いので良く伝わると言ってもらっています。
　当然僕は、学生の時に部落差別とか見たことも無かったので、学校では人権学習で習ったのですが、地域性があって、千晶の方は部落の地域があって、小学校高学年から自主活とかもあって、僕は部落の無い地域の中学校で、もしかしてやってくれていたのかもしれないが、当時は興味が無かったのか、全然記憶に無いのです。
　僕は高校の時に部落差別に関わる学習が記憶に残っています。部落の男の人が来て「結婚差別」の話だったと思います。彼女の家に挨拶に行っても家に上がらせてもらえなくて、彼女と一緒に自殺しょうと思った話を男の方は涙ながらに話されたのを記憶しています。僕もその話に凄く共感を持って「そんな差別をしたらあかんな」と...でも、まだまだ考えが浅かったのでこんなことも思いました。部落差別で辛い思いをするのは部落の人で、僕は差別されないし、まあどうもないわ、何でそんなに一生懸命勉強するのかと思いました。
　高校生のときは、そんなに人を差別するなんて、実際、部落差別を体験するって考えたら怖い事やと思いました。僕が話す事は本に書かれている内容と重なる事と思いますが、僕は人権学習って、人の気持ちを考えるのが大切な事と思っていまして、体験した時の、僕の気持ちとか親の気持ちとかそれぞれの気持ちを考えて聞いていただきたいと思います。
　僕が始めて部落差別に出会ったのは大学 1 年の時で、その時付き合っていた女の子が、たまたま部落の子でした。最初は、部落の子と思って付き合ったのではなくて、たまたまその人のことが好きだったから付き合った。当然家にも来たし、両親も普通に対応してくれていたけど、付き合って一週間くらい経って、母さんから「眞澄、あんたあの子がどういう地域に住んでいるか知っているか、あの子は怖い地域の子やで、あの子と付き合うのはやめときや、別れたほうがええで」そんな事いわれて、最初は意味がわからんかったが、ショックで「何で別れなあかんの」といった。その子がうちの親に対して何か気の悪い事をしたのかと思ったがそうでもないし、反対する意味わからんし、母さんと話しているとその子の住んでいる地域があかん。部落差別の話を忘れていたのをその時思い出し、正直高校の時に勉強していて良かった、「部落の人は怖い」

と何回もいったので、「実際に部落の人に何かされたんか」と僕は言ったのです。「されてないけれど、世間ではそういわはると」父さんは理屈で説得しようとして「眞澄がもしその子と結婚して子どもが出来たとして、その子がもしかしたら障がいを持って生まれてくるかも知れない、そういう話をよく聞く」と、いわれてショックで、大学二年生ですから、もしかしたら子どもが障がいを持って生まれるかもしれない、そういう話も何となく分かりますが、仮に障がいをもって生まれてきたとしても、好きな人との子どもだから愛していける、大切にしていける、そういう気持ちがあったので、そういう父さんの言葉が許せなくて、結局父さんの話も母さんの話もみんな聞いた話ばかりで、それも悔しかった。先ず一つは大切な彼女を守れなかったし、もう一つは自分の大好きな両親が差別をするとは僕は信じられなかったし悔しかった。皆さんは僕の話を聞いていたら両親はどんな悪い人間かと思われるでしょうが、普段の親はそんなんじゃないし、僕に対しても真剣に向き合ってくれるし、褒めてもくれるし、叱られてもまた頑張ろうと思えたし、私はとても幸せな思いを持っていたので、そんな親が大好きなのに、そんな両親が何で差別するか、その時の気持ちが一番悔しかったです。いつもの優しかった父さん母さんに戻って、と凄く寂しい思いでした。

付き合って行く中で、もう一回だけ家で辛い出来事があって、付き合って丁度一年半くらいの時、その子が僕の母さんに対して「いつものお礼」って、かしわを買って持って来てくれたのです。なぜ、かしわかというと単に僕が「から揚げ」が大好きやという事で、うちの母さんと唐揚げ料理作ろうという意味です。何で差別しているうちの親にするのかと思われるかもしれませんが、付き合わんときといっていた親が一番最初のように色んな話を彼女としてくれて、笑い話もあり、彼女の相談とかものってくれたので、そんな事が彼女にはうれしかったようです。その時は母さんも「ありがとうな」って受け取っていたのに、その子が帰ってから、母さんが「眞澄、あの子とお付き合いするのはほどほどにしてな」といろいろ会話があったのですが最後に「あのかしわあの子の家で、さばかはったんと違うか」といわれて、僕は人生で初めてブチ切れて頭が真っ白になった。母さんと立ち話をしていたが、知らない間に「母さんおかしいで」と馬乗りになっていました。

母さんに思わずはじめてお前といってしまった。「お前さばいているとこ見たんか、何でそんな、ええかげんな事いうねん」といってしまって「あの子がどういう気持ちで、持って来たかわかるか、父さんや母さんが相談してくれたり喋ってくれたりしたのがうれしくて持って来たのに、何で分からへんのや、父さんも母さんもあんなに話していたら、あの子の良さも分かるやろ、部落とかそんなん関係ないやろ、あの子の人柄、中身をちゃんと見てやって」と。皆さんもおわかり頂けると思いますが、僕も父さん母さんの昔話で、戦時中や戦後など自分の家でにわとり飼っていて自分の家で食べていたのを聞いてきたのです。なのに、自分の母さんからそんな差別発言を聞くのは悔しかった。その後、彼女とはいろんな別の理由で別れました。

それが僕の最初の部落差別体験ですが最初に言った通り部落差別は部落の人だけでなく僕も本当に辛い思いをしたし、もちろんいけないことですが差別していながらも父

さん母さんも辛い思いをした。　地域性はあると思いますが７０歳代の人でも学んでいます。うちは商売しているので僕が部落の子と付き合った頃から差別はしたらあかんと思いながら毎日毎日悩んでいた。商売に影響するのと違うかとか。そんな不安があったので、差別をしてしまったんだと思います。
次は、千晶に自分の経験とかを話してもらいたいと思います。

千晶さん：
私は母親が部落の人で、父親は熊本で部落の人ではないと思うのですが、最初は父親の仕事の関係で部落には住んでなかったのですが、4 歳の時に両親が離婚をしたのがきっかけで部落に帰って来ました。当時、母親から部落とは聞いたことがなかったので普通に楽しく暮らしていました。そんな中で一つ疑問に思っていたことがあって今回初めて話しますが、おばあちゃんが隣の町に買い物に行ってお金を渡す時、笊が置いてあって、部落の人が来たらその中にお金を入れるように、受け取って勘定をしないということをおばあちゃんから聞いて不思議に思っていました。けれど、それ以降、他の地域に買い物に行くことがなかったし、幸い私の住んでいる地域は店が 4～5 件あったので、そこまで気にならなくなっていました。
私の住んでいる町には、気軽に声をかけてくれる近所の人がたくさんいました。４歳ぐらいなので誰かはわからないのですが、いつも一言目に「あんた誰の孫や」と。私がおじいちゃんの名前を言うと「あんたひでおっさんの孫か。おばあちゃんは元気か」とか「あんた誰の子や」と言われるので母の名前を言うと「お母さん一人でいつも頑張っているな」そんな言葉が自分にとってこの町は楽しい町やと思えたので、その当時は自分の町が嫌いだと思ったことはなかったです。
そんな感じで小学校に行きました。当時は、学校に行けばどこの地域にも自主活動学級があるものだと思っていたので小学校は楽しいところだなと思っていました。だけど、他の地域の子どもからは自主活の話は出てこないからなんでかなと思いながらも気にしていなかった。二年生になった頃、先生がたまたま自主活のチラシを配っておられたが全員に配られてなかったのを不思議に思って家に帰って母親に尋ねたら、母親が兄と私を座らして「あんたらの住んでいる町は差別されているのやで、部落なんやで」と教えてくれて、最初聞いた時、部落ってなに？と思ったけど母親の話し方とか表情が明るい話をしている感じではなかったので良い話ではないのやと思いながら聞いていました。「あんたらは今当たり前のように学校に行っているやろ、でも昔、差別がきつかったことで学校に行けなかったおじいちゃんおばあちゃんがいっぱいいたのやで、学校へ行けなかったから良いところにも就職出来なかった、そんな人らが同じことを下の世代にさせたくないという思いから自主活が始まったのやで、だからあんたらは一生懸命自主活に行って勉強するように」と母親にいわれた。その時最後に母親が「なんでここに住んでいるだけで差別されるのかな、お母さんおかしいと思う」といわれたのですが、
その時は友達に差別されることもなかったので昔の話や、自分には関係ないと思って

いました。

そのころ、私の中では自主活は第２の家になっていました。母親が働いて私と兄を育ててくれていたから、朝から夕方まで毎日仕事に行くのでおじいちゃんおばあちゃんは近くにいたのですが、おじいちゃんおばあちゃんの家には行かなくてアパートの階段で母の帰りを待っているような子どもだったので、そんな私にとって自主活は心のよりどころになって楽しみながら行っていました。小学校３年ぐらいの時、私が差別をしてしまう事件がありました。差別はいけないと母親には教えられていたけど、まさか自分が差別するとは思っていませんでした。いつも学校へ行く時、町内にある大きな公園を通っていくのですが、そこには週３回ぐらい養護学校の子どもたちが遊びに来ているのです。最初１年生から３年生ぐらいまでは何も思わなかったので、学校帰りにその子たちが遊んでいると挨拶をしたり、遊んだり普通に関わっていました。ある時に何がきっかけかわからないのですが、こう思うようになったのです。なにかこの人たち自分とは違う人や、その時思ったままいいますので、言葉は悪いかも知れませんが「気持ち悪い人らやな」と思ったのです。「その後に近寄りたくないな」思っているだけならまだマシだったのですが、公園で遊んでいるのを見つけた途端アパートは目の前なのに遠回りして公園を避けて帰っていた自分がいました。
そんな話を友達にも親にも話してないからそれが差別していることだと気づかなかったし、わたしにとっては当たり前の行動だったのです。
中学校に入った時いろんな人権学習をしてもらいました。その最初が障がい者問題だったのです。その時自分が小学校の３年から６年までの４年間思っていた行動が差別していることだと初めて気づかされたときに衝撃を受けて自分ってなんて最低な奴なんだろうと思った。自分が知らないうちに人って傷付けられているのやと思って、これではあかんと思い一生懸命学ばなくてはと初めて思いました。まさか自分がそのすぐ後に差別受けるとは想像もしなかったです。次にその話をします。同じクラスの女の子ですが、仲良くなって夏休みにその子の家に行きました。行った時、その子のお母さんとも普通に挨拶してその子の部屋で３０分ぐらい話した時、お母さんがその子を呼んだので、私はお菓子でも持って来てくれるのかなと思いながら待っていたら、二人の会話が聞こえてきました。「今日来てる千晶ちゃんってどこに住んでいる子」とお母さんが聞きました。友達が私の住んでいる町を言ったら「あんた、なんでそんな子と友達になったんや、あそこの地域は怖いとこの地域やで、今日は用事が出来たといって帰ってもらいなさい」と自分の娘に言っているのが聞こえて来ました。それを聞い

た私はまず、私が何か悪い事をしたから帰れといわれたと思ってその子の家に上がってからの３０分間を振り返りました。挨拶はちゃんとした、靴もきちんと揃えた、お母さんとはそれ以外会話はしていないのに、それのどこが悪いのかわからなかった。お母さんから帰れと言われている以上、その子の家にいるほど強い私ではなかったので帰りたいと思った。向こうも何と言って帰ってもらおうと気まずそうにしてきたので私から「ごめんな、用事が出来たので今日は帰るわな」といって帰った。帰り道にもう一度考えたけどわからなかった。その時ふっと母親の一言を思い出した「あんたらの住んでいる町は部落なんやで」といったことを、、、ああこれがお母さんの言っている差別なんやとわかったときあれだけ好きだった自分の町が一瞬にして嫌になった。私がこんな所に住んでいるから差別されるのや、こんな町嫌やわと思いました。こうも思ったのです。自分が差別されるのであれば友達っていらん、また別の友達の家に行ったら同じこといわれるかもしれん、じゃ友達なんていらん。家に帰ってこの話を母親にしょうと思ったのですが、うちの母親は部落に住んでいることをすごく、今もですがマイナスに思っているのです。親がここに住んでいるから仕事場でもいろいろあることを、時々夕食のとき聞いていたので、そんな母親に今日こんな事あったといってもいいのだろうかと自分の中で思った。母親は強い人だとは思うのですが、自分たちは何も悪いことしてないのに差別されてるというと、自分を追い込むのではないかと自分の中で消化した。自主活にも参加していたから担任の先生にでも話せば楽だったかも知れないが、こう思いました「学校の先生なんかに話したら自分の母親に話がいく、しゃべったらあかん」そんなことが中学校の時にありました。
高校３年のとき、付き合っていた彼のお母さんにも直接ではないのですがこんなことも言われました。私が自分から部落出身だと話していて、彼は部落のことを理解出来てなかったのか母親に言ったのです「俺の付き合っている彼女は部落の人やで」お母さんは「あ！付き合うのはかまへんで」そこで終わってくれたらよかったのですが「でもな、結婚するといったら反対するからな」その彼は部落差別が分かっていなかったからか私に「なんでか」疑問をぶつけるために「俺の親こんなこといってた」と。その時私はまたか、、、まだそんなこという人いるんやな。何回もそんなことあるなら自分が部落出身だといえる人には最初からいった方が楽やと思うようになり、それ以降付き合った彼は私が部落だと知って付き合ってくれた、その一人が眞澄さんです。
私たちの出会いはスポーツジムで最初は出会う二人ではなかったのです。わたしはスタジオで踊ったりして、眞澄さんは一人で体を動かすとこにいたのです。
ジムに共通の友達がいて「マロという人がいてな」また次の日「マロという人がいてな・・・」何回もマロという名前が出て来たので気になって「マロって誰なん」と聞いたら「あそこに一人で筋トレしているから呼んでくるわ」と呼びに行ってくれました。
私の第一印象はかっこいい人やな、優しそうな人やなぁと思っていました。
いろんな話をしてゆく中で私はいつか、この人に私が部落出身だと話せたらいいなと思っていました。そんなとき丁度タイミングよくそんな機会がありました。
どんなことかというと、小学校と中学校は自主活があって高校生になると高校生友の

会というのがあり私はそれにも参加し会長をしていたのです。その時、友の会に入って来てくれた子が発達障がいを持っていて関わり方がわからなかった。その子は自分を見て欲しいから私の話をきいてくれないので、イラッとしてしまい「話が聞けないのなら帰るか」といってしまいました。そういう自分が嫌でその子との関わりで悩んでいた時、話を聞いてくれていたのです。そんなとき今だったら私が部落だと言えると思い「実は私は部落出身だから、こんな子たちと関わりこんな活動をしている」と初めて話したのです。その時「言えた、よかった」と思いました。
が、マロの次の言葉で、あ！いわなければよかった。やってしまった・・・と思いました。それが先ほどの前の彼女の話でした。
その話を聞いてお父さんお母さんを説得する自信がなくなったのです。この先この人と付き合って結婚となった時、また反対されるのかと思いました。
そこからいろんな話をした最後に「でもな、俺そんな差別間違っていると思うしおかしいと思う」と強い口調で言ったのを聞いた時、この人とだったらこれから先付き合っても乗り越えられるかもしれないと思いました。

眞澄さん：
僕は千晶が部落出身だということを理解して付き合っていたし、その先には結婚も考えていたし、僕自身も部落に対して興味がありました。何でかというと前の彼女と付き合っていた時、親は「恐いとこや」というけど僕は怖い思いしたことないし、もう一度部落の中に入って体験したいと思っていた。高校生友の会にも毎週参加していました。

千晶さん：
付き合っていた時、全国の高校生集会にも一緒に参加したり、ほかの地域との交流会にも参加してくれた。ふたりの中では両親に反対されても「これは違う」といえるように勉強しました。そんな中、私の中では「結婚出来るかな」と思っていました。半年ぐらいたった時「結婚考えている」と聞いたら、はぐらかされてしまいました。なんでいろんな活動一緒にして理解してくれているはずなのにと思いました。私は母親にはマロの両親の部落差別の話は一切話していなかったし、誰に相談しょうかと思った時、高校生友の会のメンバーに相談しました。
「マロの両親部落差別している親やねん。この先、もし結婚しょうとなった時反対されるかもしれへん。どうしたらいいんやろ・・・」と話をしました。
答えは「千晶ちゃん大丈夫やで、なんかあったら僕らが、私らがおるで。心配せんでもいいで」その言葉が私にとっては唯一の救いでした。親にも言えない、仲の良い友達にも部落だと公表してない中での救いでした。

眞澄さん
：全然関係ない話をします、学校で部落差別はいけないと習いそんな気持ちはあった

のですが、そんな僕が部落差別をしてしまう。また前の彼女の話になります。親から「部落は怖いとこや」といわれるまでは部落に遊びに行っても何とも思わなかった。僕の生まれ育った町とおんなじように思っていた。けど怖いところやといわれてから、実際彼女の町に行ったら何故か気になって髪の毛を染めている人やガラの悪い人がいると近寄らんようにとか、部落の町で真面目そうな子に出会っても何か気になって考え込むと段々悪い方向にいってしまい、人だけでなく見るものも気になりました。例えば車。高級車だとガラが悪いのではないか、汚かったりボロイ車だと、お金に困っていて悪いことをするのではと思った。だから、この子と付き合うの考えた方がいいかなと思ったりしました。けれど、学校で人権学習していたのでまだまだ偏った考えだけどそういうことはあかんと思ったので家に帰って考え直した。僕も大学のとき髪の毛染めていたし、友達も染めているし、けどあいつと話していると楽しいし、髪の毛染めているあの子とも意外と友達になれるかもしれない、僕の車も汚いし、僕の町も部落の町もみんな一緒ではないのか。もし、人権学習が全然なかったらきっと差別していたし、僕が差別を広げていたと思う。恥ずかしい話、人権学習の大切さを知っていたのにしてしまった。だから今中学生や高校生にしっかり伝えて行かなければと思っています。
親が変わってくれたのはなんでかというと僕がしたことはちょっとだけで親が眞澄を幸せにしたいと思ってくれたことやと思います。前の彼女のときは親ふたりだけで悩んでいたのに、今度は親がいろいろ行動してくれて、町の人権学習受けたり、石材店しているのでお寺の住職さんに相談したりして宗教の教えを受けたりして住職さんに「大丈夫やで」と応援してもらい、周りから部落差別をいわれてもふたりだけで悩むのではなく住職さんや仲間がいて変わってくれました。
さっき結婚の事で、はぐらかしているといわれましたが、それは前の彼女が辛い思いをしていたのと同じような思いをまたさせたくなかったからで、そんな思いを踏み出させてくれたのも住職さんで「結婚のことで悩んでいるやろ、お父さんお母さん相談に来られたけど眞澄君大丈夫やで」その時、初めて親が相談しながら部落のことを乗り越えようとしてくれていることを知り嬉しく思いました。僕のことを父さん母さんと同じように思ってくれている住職さんがいることが嬉しかったし、今後なんかあったとしても住職さんが守ってくれると安心感があり仲間が大切だと感じました。
その後、付き合って１年ぐらいたって「結婚したい」といった時、両親がすんなりと「そうか、千晶さんと一緒に幸せになりや」と、簡単にいってますが、その時は両親が本当に変わってくれたと涙でいっぱいになりました。今はうちの親と千晶が本当に仲良しで、僕も親も千晶も本当に幸せだし部落差別を乗り越えた時にみんなが幸せになれると思っています。
僕が差別を体験して思ったのは学び続けることが重要やと、親も宗教から学んだから、説得してくれた住職さんも学んでいるからやと思います。
千晶にバトンタッチします

千晶さん：
結婚して１２年目にはいったのですが６年７年ぐらいはお父さんお母さんと部落の話とか人権に関しての話とかは一切していないのです。いろんな事情があったのですが、先ほど太田さんから本の紹介をしてもらったのですが本以外にも DVD とか出させてもらって、その DVD にもお父さんが出演してもらっているのですが、その取材とかあって、その頃からお父さんが「いつもどんな話をしているのや」と聞いてくれて「こんな話をしている」とかをきっかけにいろんな話をすることが出来るようになりました。そんなときお父さんから「千晶ちゃんあのな」と宗教の分厚い本をもってこられて「ここに部落の話が書いてあるので、もし良かったら読みな」多分今までもそんな話がしたかっただろうけどなかなか出来なかった。それがきっかけでできるようになったし、私もお父さんお母さんに話せるようになった。
結婚した当初はそんな話が出来ないことが自分の中では「何で！」と思っていたのが今では出来るようになって本当に幸せです。
６～７年前になりますが、お父さんお母さんが市民向けの人権講座に聞きに来てくれた。お母さんは感受性が豊かで当時を思い出しながらハンカチで目を抑えながら聞いてくれた。お父さんは眉間にしわを寄せながら聞いてくれ、後で感想を聞いたら「わしらは、あの時申し訳のないことをあの子にしていたのやな、今、思うとほんまに反省しなあかんな」といってくださった。そんな話の後で「お父さん一つ聞いていいですか、私が最初の部落の人やったら結婚 OK してた」と聞きました。「恐らく OK はしてなかったな」と答えてくれました。その時、その答えがお父さんの本当の気持ちなんだと思いました。そう思うと私は前の彼女がいたから結婚できたのやと思うと私も彼女には感謝の気持ちがあります。
最後にお父さんの手紙を読ませてもらって終わりとします。

「差別の考え方の変化」

私の生まれた地域は戦前から在日韓国人の小さな集落と被差別地域出身の方が数件あり、戦後の小学生中学生のころも同級生としてなんら差別する気持ちもなく付き合い一部の家とは互いに商売上の関係もあり普通の付き合いをしていました。兄や姉たちの婚期が近くなると家柄を重んじる当時の考え方から婚姻問題には特に神経を使っていたようです。近くに住んでいる従弟も子どもたちの縁談については必ず先方の聞き合わせに行ったり、心配する先でなくて良かった、とかそんな話を良く耳にしてきました。私が２９歳の頃に母が気に入った近くの禅宗寺院の一人娘と結婚し、やがて二人の子どもを授かりました。
成長し適齢期になればやはり親と同じ心配をしていたと思います。４０歳の頃から縁あって我が家の帰属する浄土真宗の寺院の小さな役職を受け、その後４８歳から門徒総代を務め、数多くの研修のおかげで次第に宗教的な考え方が芽生え始め差別の問題を勉強する機会の御縁を頂きました。この頃、町の中では駅、スーパーや公共の便所で

差別の落書きが多く見つかり町も対応に乗り出す中、地域内の浄土真宗全寺院の住職と門徒総代が出席する総会の席、出席した一人の住職からあからさまな差別発言があり大きな問題となりました。これをきっかけに宗教会においてもいろいろな研修でも必ず差別問題の研修が義務づけられました。そんな時、御本山での研修で歎異抄の中の親鸞聖人のお言葉を目にして心打たれました。「一切の有情はみなもって世々生々の父母兄弟なり」この意味は念仏者だけでなく全て衆生は同じ命につながる父母兄弟である。とのこと。今の自分は多くの命のつながりにより存在しています。そうなるとほかを差別することは身内を差別することにほかならないのです。私が差別という迷いから目覚めたゆえんはここにあります。子どもたちの年齢が婚期に近づいた頃、住職に「今まで研修を受けてきましたが差別については僧侶方も建前と本音が違うように感じますがいかがですか」と尋ねたところ「今まで何を聞かせて貰っていたの」といわれ目が覚めました。浄土真宗は親鸞聖人の生き方を学ばせて頂き、後に続かせて頂く教えでありました。親鸞聖人の生き方に学ばせて頂くと、迷いの気持ちも薄れその後長女の結婚に対しても聞き合わせも一切しませんでした。長男から婚期の相談を受けた時も迷わず賛成しました。今、私は眞澄達夫婦の活動を誇りに思い心から応援しています。
人との付き合いは互いの本音がわかって初めて親密な関係が保てると思います。私は今迄の間違った考えに気づかせて頂き、考え方を改めてからは全ての人に分け隔てなくわだかまりなく接することが出来ています。すべての人に皆同朋（友達）としての接し方が大切だと思っています。やり直しのできない人性悔いを残さず楽しんでいきたい

という手紙を書いて頂きました。
最後に皆さんに伝えたいことは、人はいろんな考え方もありますが自分なりの人権感覚を磨いてほしいと思います。
長時間ありがとうございました。

第 12 回対話集会

冬枯れの光景から春の連帯へと向かう部落解放運動

日　時：2019 年 10 月 13 日（日）　　15 時～
　　14 日（月・祭）　　12 時 30 分

場　所：大阪梅田教会サクラﾌｧﾐﾘｱ
発題者：谷元昭信さん（元部落解放同盟中央書記次長
　　大阪市立大学・関西学院大学非常勤講師
　　部落解放論研究会共同世話人）

「解放運動の冬枯れから春へ」をメインテーマに「解放運動を変容した部落実態に適応した運動に」をサブタイトルとしてこれからの解放運動の展望が出来るような「対話集会」になることを期待しながら・・・・

---------- キリトリ ----------

第 12 回対話集会　　申　込　書

名　前		
住　所		
連絡先	TEL	FAX
	E-mail	

参加費：10000 円（宿泊・交流会）・3000 円（交流会参加）・500 円（集会のみ）
（参加部分を〇して下さい）
申し込み締め切り　　9 月 20 日（金）
連絡先：カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター
　　TEL／FAX　075-223-2291　E-mail:bukatu@kyoto.catholic.jp